

## 植田弥生\*・辻 誠一郎\*：三方低地帯北部，中山のスギ埋没株とその放射性炭素年代

Yayoi UEDA\*・Sei-ichiro TSUJI\*：The buried *Cryptomeria japonica* stumps and their radiocarbon ages at Nakayama in the northern part of the Mikata lowland, along the Wakasa Bay

活断層として広く知られる三方断層の西側には三方低地帯とそれに続く三方五湖が広がっており、西端は山地に食い込むようにポケット状の低地をかたちづけている。これは三方断層の西落ち東上がりの傾動により西側低地が埋没して生じたものとされ(岡田, 1984), これを裏付けるように低地帯の中央部から西側では著名な鳥浜貝塚やユリ遺跡など縄文時代以降の埋没遺跡が発見されている。これまでに行われたそれら遺跡発掘調査や付近の圃場整備工事で縄文時代中・後期を中心とする埋没林も見出されており、低地にかつて森林が存在していた証拠として重視されるばかりでなく、当時の森林生態や人間と植物との関わりを考える上で見逃すことはできない。筆者らはこれまでに低地南部の黒田に近い江端遺跡の埋没林や鳥浜貝塚南西方の牛屋遺跡で見出された埋没林の樹種構成や放射性炭素年代を報告してきたが(辻・植田, 1991; 辻ほか, 1991), 低地帯北部の中山において埋没株の新たな放射性炭素年代を得たので樹種同定の結果とともに報告しておきたい。

調査地の中山はおよそ北緯  $35^{\circ}34'7''$ 、東経  $135^{\circ}54'30''$  に位置し、標高約 18 m、南北に約 50 m、東西に約 400 m の広がりをもつ小さな袋状の低地である。地元の人々によれば近年しだいに水位が上昇してきたといい、過湿なため水田耕作を放棄しているところが多い。中央部はすでに池となっており、西端ではヨシの湿地やハンノキ湿地林が成立しているところもある(図 1, 2)。埋没株は主に北部の水田中や水路に根張りの状態で点在している。耕作の障害になるため掘り出された株は北西部に山積みされており、また畦にも並べられているが、年々減少しているので少しづつ焼却処分されているようである。

放射性炭素年代に供した埋没株は、1990年11月25日に北西部の水田中の地表面に露出していた根張り埋没株 9 と埋没株 10 の 2 点である(図 1, 2)。採取した株の一部の放射性炭素年代は学習院大学年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。その結果、埋没株 9 の木材片は  $3350 \pm 90$  y.B.P.(GaK-16518), 埋没株 10 の木材片は  $4000 \pm 100$  y.B.P.(GaK-16519) と測定された。測定値の算出には LIBBY の半減期 5570 年が使用

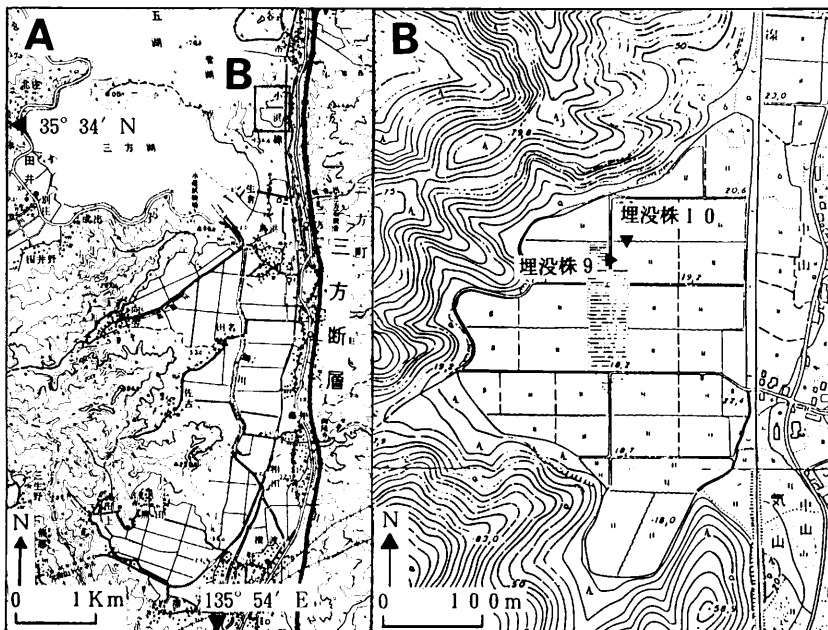


図 1 三方低地帯と調査地の位置



図2 北方から見下ろした中山と埋没株9と埋没株10の位置

図3 埋没株10の産状

された。樹種同定の結果は2点とも次に示す特徴が観察され、スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. DON に同定された。すなわち仮道管と放射組織および樹脂細胞からなる針葉樹材で、樹脂細胞は年輪の外半分に散在または短接線状に分布し、分野壁孔は大型のスギ型で1分野に主に2個水平に並び、放射組織は柔細胞のみからなる。樹脂道はない。樹種同定用のプレパラートは各試料から剃刀で切り取った横・接線・放射断面の3方向の薄片をガムクロラルに封入して作成し、光学顕微鏡下で観察した。標本番号は埋没株9がYW-333、埋没株10がYW-334である。試料とプレパラートは大阪市立大学理学部生物学教室に保管してある。

1993年11月3日の調査では2試料を採取した水田は休耕田になっていたため埋没株10を発掘したところ、根張りの広がりはおおよそ南北に2m80cm、東西に3m50cmあり、根は複雑に分枝して絡り、板根のようにになっている部分もあった(図3)。幹はほとんど残存していないので樹齢を測定することはできないが、このような根の広がりからかなりの樹齢であったと思われる。岡田(1984)は、詳細な場所や樹種は記載していないが、中山から得られた埋没株1点の放射性炭素年代が $3080 \pm 200$  y.B.P. (GaK-3600)であると報告している。ここで報告した年代より若干新しいが、埋没株9と10の測定値に約650年の差が

あることを考えれば、一連のものともみならずともできる。三方低地帯南部の黒田におけるスギ埋没株の年代は約 3500~3000 年前と測定され (高原ほか, 1988; 辻・植田, 1991), 北部の牛屋遺跡におけるスギ埋没株は約 5000~3300 年前と測定されている (辻ほか, 1991)。これらの年代値はほぼ縄文時代中期から後期のそれに対応し、その頃の三方低地帯には広い範囲にわたってスギが分布していたことを示している。

## 引用文献

- 岡田篤正. 1984. 三方五湖低地の形成過程と地殻運動. 「1983 年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 4—」, 9-42. 福井県教育委員会 福井県立若狭歴史民俗資料館.
- 高原 光・伊藤孝美・竹岡政治. 1988. 約 3,000 年前のスギカミキリ被害材と当時の森林環境. 日本林学会誌, 70(4):143-150.
- 辻 誠一郎・植田弥生. 1991. 江端遺跡周辺の埋没林と古地理の復元. 「角谷遺跡・仏浦遺跡・江端遺跡・牛屋遺跡」, 105-110, 図版 30. 三方町教育委員会.
- ・———・鈴木三男・能城修一. 1991. 牛屋遺跡と周辺の古環境. 「角谷遺跡・仏浦遺跡・江端遺跡・牛屋遺跡」, 127-136, 図版 37-38. 三方町教育委員会.
- (\*〒 558 大阪市住吉区杉本 3-3-138 大阪市立大学理学部生物学科 Department of Biology, Faculty of Science, Osaka City University, Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka 558, Japan)

(1994 年 9 月 17 日受付, 1994 年 11 月 5 日受理)

書評 (新刊紹介): 森川昌和・橋本澄夫. 1994. 日本の古代遺跡を掘る 1 鳥浜貝塚—縄文のタイムカプセル. 206pp. 読売新聞社, 東京.

「日本の古代遺跡を掘る」シリーズは、この約 20 年間に発掘調査された遺跡の中で重要な発掘とされる遺跡調査の生々しい発見の感動を直接調査に関わった研究者から聞き出そうと企画されたものである。本書はその最初を飾るものである。このシリーズの監修者である大塚初重がいうように、鳥浜貝塚の発掘調査は、これまでの通説であった停滞的な縄文人の生活観を根底から覆すほどのものであった。著者の森川昌和は長らく鳥浜貝塚の発掘調査に直接関わり、橋本澄夫も石川県内の縄文遺跡の発掘調査に関わってきた研究者で、ともに日本海沿岸域における縄文文化の解明に深く関わってきた。そのためか、発掘調査に誘い込まれるような臨場感が漂い、遺跡発掘とりわけ低地の発掘調査の醍醐味を満喫できる。

本書は森川による第一部鳥浜貝塚 7000 年の四季と橋本による第二部縄文人の世界の 2 部からなる。第一部は、二十五年調査の歩み・木の文化の原点・鳥浜村をさぐる・鳥浜村の四季・鳥浜貝塚、日々の用の 5 章からなる。遺跡の発見や発掘調査への取り組み、自然科学との共同調査の経緯など、地元の若狭考古学会会長である上野晃らのエピソードをまじえながらの苦闘の記録は読みごたえがある。第二部は、縄文文化と現代の暮らし・縄文人の日本列島・食料の獲得・調理と調理具・ムラと住まい・衣服と服飾・信仰の生活・人の移動と交易・縄文社会の終幕の 9 章からなる。森川が鳥浜貝塚の発掘調査とその成果を詳細に紹介したのに対して、橋本は日本列島における縄文文化を概括し、鳥浜貝塚を含め縄文時代のこれまでの発掘調査が原始人社会であったとする縄文社会観を変えてきた所以を説いており、2 部の構成はなかなか意義深いものがある。

縄文人の生活やそれをとりまく環境については分からないことがまだまだある。植生史についてもまだまだ分析的資料にとどまるのがふつうである。本書で語られる人の生活、生業、環境などがどのようにして復元されたかをあらためて考え直してみると、すべて分かってしまったような感覚ではいられないことにきつと気付くはずである。つまみ食いするような調査ではなく、遺跡発掘に根ざした精緻な調査研究がこれからもしっかりと育まれることが、これからもさらに縄文時代観を変えていくであろうことを痛感させる良書である。

(辻 誠一郎)